
「三里塚闘争」のあらましと映画『三里塚に生きる』

道場親信 所員／現代人間学部准教授

ドキュメンタリー映画『三里塚に生きる』の背景となる「三里塚闘争」、つまり成田空港反対運動がどのようなものであったか、ごく簡潔にふりかえった上で、映画のあらましについてまとめておく。

三里塚闘争は、高度経済成長が本格化した 1960 年代に、航空需要の増加を見越して首都圏に第二国際空港を政府が計画したことが発端となっている。当初、茨城県霞ケ浦、千葉県浦安沖、木更津沖などが検討されたが、政府与党の有力政治家の利権争いなどもあって決まらず、1963 年になって千葉県富里村・八街町（現在はともに市）にまたがる滑走路 5 本の大型空港案が提示された。1500 戸が立ち退くというこの計画に地元では激しい反対運動が起こり、県知事も同意しなかったことから政府はこの案を断念し、66 年 6 月に急遽浮上したのが三里塚案であった。

三里塚案は富里・八街案を半分以上に縮小し、滑走路 3 本に減らした「暫定空港」案であった。用地は国有地と県有地で約 3 分の 1 を転用でき、残りの敷地は大正期から戦後期にかけてこの地に入植した開拓農家が大半を占めているため、地域への定着度の低い開拓農家であれば立ち退きに応じるだろうという政府側の目論見もあった。空港の形は周辺に広がる古い農村（古村）を避けてデザインされている。建設を急いだ政府は提案の直後に閣議決定をし、建設主体である新東京国際空港公団をすぐに設立したほか、早い段階から強制収用をちらつかせるなど力で押す建設の姿勢が際立っていた。

地元ではこれに対して空港反対同盟を結成、測量の阻止や土地の強制収用（代執行＝建設主体である空港公団職員の手では無理な作業を警察官の武力で強制的に実行すること）に反対し、やがて開港を阻む闘いに乗り出していった。

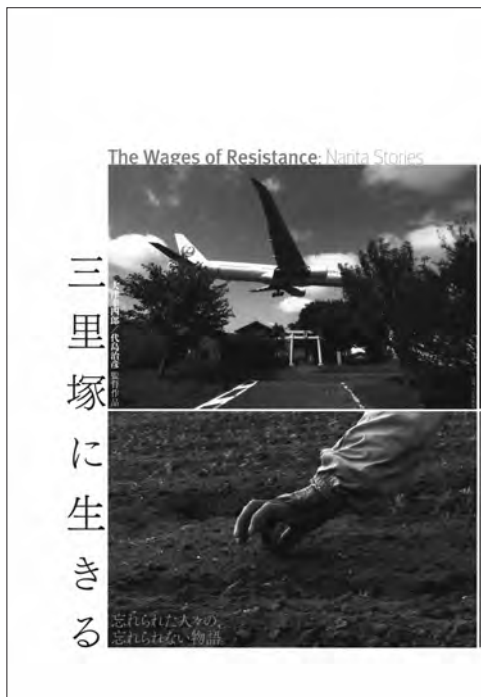
1971 年春、重要地点の強制収用に乗り出した政府側は、数千員の機動隊員を投入して、収用地点にバリケードを作って立てこもった反対同盟員を排除、数日間の激突によって多数の負傷者を出した。半年後の 9 月、二度目の強制収用に乗り出した政府側と反対同盟の間で激しい衝突があり、警察官 3 名が命を落とす事態となった（東峰事件）。警察側は村の青年たちを逮捕し、村には暗い空気が立ちこめるようになった。10 月に青年行動隊の 1 人であった三ノ宮文男さんが自ら命を絶った。映画『三里塚に生きる』に登場する秋葉清春さん、柳川秀夫さん、石毛博道さんはこのとき罪に問われた一員である。裁判は長期にわたったが、被告はいずれも殺人に関わっていないことが裁判で確定した。

9月の強制代執行では、大木（小泉）よねさんというおばあさんの家が唯一宅地として強制収用され、彼女が長年住んだ家が破壊されて無一物で放り出される結果となった（映画に登場する小泉英政さんは、このよねさんの養子となって三里塚に生活が続けている精農家である）。憎しみは憎しみを呼び、闘争はエスカレートした。反対運動側の火炎瓶の使用や「ゲリラ」の名による個人襲撃、放火などが続く一方、警察側も反対運動支援者への暴力、リンチ、住民の監視、検問などのいやがらせが続いた。

1977年5月、反対同盟の集会で怪我人の世話をしていた支援者が機動隊員の放った催涙弾を頭部に受けて死亡、翌78年3月には支援団体の空港突入部隊により管制塔を占拠、機材の破壊が行なわれ、開港は2か月延期となった。

この間、反対同盟の中で、末永く闘いを続けるために農業のあり方を見直そうという動きがあり、有機農業に取り組むグループが誕生した。有機農業の動きは反対同盟内外の人びとを巻き込んで産直の運動となり、いまもいくつかのグループが活動が続けている。映画に登場する堀越昭平さん、元青年行動隊リーダーの島寛征さん、柳川さん、小泉さんはそれぞれグループは違うが有機農業を協力しながら続けている。

1980年代になると、空港の2期工事（第2ターミナルとB滑走路の建設）が始まるが、滑走路用地に反対派が健在であるため、工事は進まなかった。90年代に入ると、長期にわたって地域を強制収用の脅威の下に置いている国側に強制収用を断念させるための問題提起が反対同盟側からなされるようになった。91年から93年にかけて反対同盟熱田派（反対同盟は83年に熱田派と北原派に分裂、87年に北原派が同派と小川派に分裂して同盟は3つになっていたが、最大多数派が熱田派であった）と国・空港公団の間で空港建設過程を検証する「成田空港問題シンポジウム」が開かれ、国側は誤りを認めて謝罪をした上、強制収用を放棄した。こうした国側の対応により、移転を受け入れる反対派農家が増



映画『三里塚に生きる』大津幸四郎・代島治彦監督、140分、2014年、パンフレット表紙。

え、用地内の中央にある「木ノ根」集落、B滑走路予定地の中央にある「天神峰」集落、予定地外の騒音地区となり、反対運動では最も運動の強かった「辺田」地区の移転が行なわれた（すべての住民が移転したわけではない）。映画に登場する椿たかさん、萩原勇一さん、三ノ宮静枝さんはこうして「辺田」から移転した農家の人びとである（静枝さんは自死した文男さんのお母さんである）。

こうして反対派農家は90年代以降大きく減ったが、いまでも反対運動を続けている人たちがいる。映画に登場した山崎宏さんは支援セクトの現地常駐者として20数年三里塚に住み続けている。柳川秀夫さんは反対同盟熱田派の世話人としていまでも有機農業と反対運動を続けている。小泉英政さんは反対運動には関わらないのをやめたが、いまでも用地内で生活し、有機農業を続けている。

三里塚闘争に関しては、闘争の初期から映像記録集団「小川プロダクション」が住み込みでドキュメンタリー映画を作り続けていた。1969年に製作された最初の作品が『日本解放戦線 三里塚の夏』であり、『日本解放戦線 三里塚』（70年）、『三里塚 第三次強制測量阻止闘争』（70年）、『三里塚 第二砦の人々』（71年）、『三里塚 岩山に鉄塔ができた』（72年）、『三里塚 辺田部落』（73年）、『三里塚 五月の空・里の通り路』（77年）とシリーズ作品を製作している。大津幸四郎カメラマンは、このうち最初の「夏」の撮影に関わった。先にふれた椿、萩原、三ノ宮の各氏は三里塚シリーズにはしばしば登場する人物であった。

『三里塚に生きる』はこのような背景からいまでも三里塚に生きる人びとのくらしと考えを記録した映画である。支援者山崎宏さんの人生、移転した人びとの思い、闘争が何であったかについてのふりかえり、東峰事件とその後の三ノ宮さんの自死をめぐる元青年行動隊員の回想、有機農業についての思い、小泉よねさんへの思い、それぞれの立場から自分がどのようにして生きてきたか、いまどういう思いで生きているのかが語り出される。